



掌に握りしめた
雪のようにな

折口信夫と
近代のゆくえ

2008年12月22日(月)
15:00 - 17:00
地球研・講演室

講師：安藤 礼二氏
(多摩美術大学准教授)

申込不要・聴講無料

掌に握りしめた雪のように 折口信夫と近代のゆくえ

降ってきた雪を握りしめると、雪は掌のなかで溶けて水となって消えてしまう。掌に残るのは雪の冷たさだけだ。実体は何もないが、それゆえに際立つ雪の冷たさ、そして清らかさ。

あたかも掌に握りしめた雪のように――

亡くなる直前の折口信夫（釈迦空1887-1953）は、日本の短歌、ひいては日本文化をそんなイメージに託した。内容は何も残らないが、ある思いだけは残る。これほどの確で、しかも詩情あふれた日本文化イメージはないと絶賛し、この一節を筆者に教えてくれたのは、以前本セミナーでもご発表いただいた花人の川瀬敏郎氏だった。自分の花もまたそうだ、内容なんて何もない、と。それ以来、折口信夫という名前がずっと頭にひっかかっていた。

折口のいう「握りしめた雪」とはいったい何なのだろうか。なくなってしまうこと、何もないことに注目したのか、あるいは何もないが思いは残るということに注目したのか。もちろん後者なのだろうけれども、そうだと残る「思い」とは何なのか。そこに意味はあるのか。

いずれにせよ、これは相当手ごわい。言うまでもなく、少なくとも現代のわれわれにとって、ひとたび何かに取り組んだとしたら、内容はあつて当然だし、意味のあるものを求める。求められる。環境問題などにたずさわっていたらなおさらだ。なくなることではなく残すこと、壊すことではなく保全すること。ベクトルはいつもそっちを向いている。

折口の発想はそれとはまるで反対を志向している。同じく死の直前にとりくまれた「自歌自註」では、自身の歌について「内容空虚で、空気菓子をしやぶるやうな処」という言い方もしている。無内容、無意味、空虚、虚無…。そんな折口の終着点に注目し、独自の近代日本論を展開しているのが、文芸評論家の安藤礼二氏である。

今回は安藤氏とともに折口の短歌論・日本文化論を検討し、いまわれわれが本当に残さなければならぬものは何か考えていきたいと思ひます。

(環境思想セミナー担当: 鞍田崇)

【講師】 安藤礼二 ANDO Reiji

1967年東京生まれ。文芸評論家。早稲田大学第一文学部考古学専修卒業。現在、多摩美術大学美術学部芸術学科准教授、同芸術人類学研究所所員。

2002年、「神々の闘争―折口信夫論」で第45回群像新人文賞評論部門優秀作受賞(『群像』2002年6月号)。2006年、『神々の闘争 折口信夫論』(講談社)で芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。

著書に、『近代論 危機の時代のアルシーヴ』(NTT出版・写真3)、『光の曼陀羅 日本文学論』(講談社)、編著書に『初稿・死者の書 折口信夫』(国書刊行会)などがある。

日時： 2008年12月22日（月）15:00-17:00

会場： 総合地球環境学研究所（地球研）講演室

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山475-4

申込不要・聴講無料

主催：総合地球環境学研究所
プロジェクト「農業が環境を破壊するとき」
(リーダー：佐藤洋一郎・地球研副所長・教授)

【アクセス】

■JR・近鉄沿線：

京都駅で地下鉄烏丸線に乗り換え、「国際会館」下車。国際会館駅バスターミナル2番乗場から京都バス40系統（京都産業大学ゆき）もしくは50系統（市原ゆき）にて（約10分）、「地球研前」下車スグ。

■阪急沿線：

烏丸駅で地下鉄烏丸線に乗り換え、以下は同上。

■京阪沿線より

出町柳駅で叡山電鉄鞍馬線に乗換え、「京都精華大前」もしくは「二軒茶屋」下車、徒歩10分。

■車・タクシーでお越しの方は

国際会館より府道40号線で二軒茶屋方面へ。



人と自然：環境思想セミナー
～次回の予定～

第18回

「神游(かんあそひ)の庭(ゆにわ)
―糺の森の原風景を求めて」(仮題)

新木直人氏
(賀茂御祖神社宮司)

2009. 02. 15. (月) 15:00-17:00
地球研・講演室

お問い合わせ

環境思想セミナー担当 鞍田崇 (研究員)

075-707-2382 fax.075-707-2508 kurata@chikyu.ac.jp

<http://www.chikyu.ac.jp/sato-project/thought.html>